

を表門跡と稱し、東を御裏など呼べる故なり。三州名跡誌に、西・東兩掛所共に、金城築城以前は城地にありしを、寛永十一年各、今の地に移轉建立すと載たれど誤説といふべし。

○本願寺別院來歴

三州志に云本願寺西末寺は貞享二年の由來書に、往昔城内に有之處、一旦退轉に及び、其の後利家卿令室芳春院殿より彌陀の本尊木像と百間四方の寺地を御城邊にて被下、再建仕處、元和元年玉泉院殿の居所と成るに依り、今之地に移轉すとありて、三州志にも此の由來記を引證せり。平次按するに、其の昔城内にありといふは、所謂尾山本源寺の事也。松梅語園に、昔當國一揆原の時、本願寺の末寺を建つる時、地所を米六石に永代買取り、一寺を建て、寺號を本源寺と名付く。と見に、土屋義休の金城隆盛私記に、親鸞上人三世嫡孫覺如上人。曆應康永中北陸道修行之節。當國諸民歸依念佛宗。故一字堂建立此山云々。とあり。また三壺記にも、金澤城に昔本源寺の末寺有りて、在々所々より參詣して、御山と申しならしけるといひ、加賀古蹟考には

本願寺より小立野山の尾崎に道場一字を建てたり。故に世俗尾山の御堂と稱し、また金澤の御堂と呼べりと。天正四年の頃當國一揆大將共より本願寺へさゝげゝる書簡の文中に、於金澤御堂とある是也。といへり。又一旦中絶退轉といへる事は、天正八年閏三月尾山落城の時をいへり。三州志鍵叢餘考に、此の時守將松永丹波を初め防撃奮闘すれば守るに堪へず。悉く戦死す。依つて、本源寺廣濟寺・恵林坊・善照坊等城を佐久間玄蕃に與へて去る所あり。さて其の後城邊に再建せしは天正十五年なり。貞享二年の由來書に、證如上人の時、天正十五年に當地末寺建立、御城後町に在之。利家卿御代只今末寺安置之阿彌陀木佛御城内に在之、御覽之上末寺に建置候様に、本寺に被仰遣。とあり。此の佛像は則ち往昔城内本丸の地にありし本源寺の本尊也。關屋政春の古兵談に云ふ。金澤城内本丸の廣間は、下間法橋の時の御堂を其儘廣間に用ひて、利家卿の時まで有りたり。或時利家卿廣間の上を御覽あるに、菰に包みたる物棟木に結付けてあり。何やらんと下して御覽あるに、阿彌陀の像也。芳春夫人其由聞召し、御所望ありて持佛堂に

置かせられたり。此事上方の門跡へ聞えければ、是は門跡家になくて不叶本尊也。亂世以後何と成りしや知れざる處、幸の儀申請度しとの事なれども、芳春夫人中々御同心なくて遣されず。御他界以後此の本尊をば金澤表末寺照圓寺へ渡されけり。葛巻藏人寺社奉行の時、此一々を利常卿の御耳に立てければ、内々兼ねて御聞及被成たり。其の阿彌陀寺へ寄進成さるべしとて、それまで照圓寺後の惣構の端片原町なるを、照圓寺へ賜はり、今は寺内へ圍ひ入れたりと、葛巻藏人語りけり。と見に、有澤武貞の古兵談殘襄集には、表末寺の本尊は、金澤城本丸御殿は昔の御堂たりしに、或時當番人屋根裏を見れば、古葛籠の釣上げあるを見付け、番人慰に卸して明け見れば、阿彌陀の像也。芳春院殿へ上之るに、御悦び被成、御持佛堂の本尊に被成御秘藏也。後には表末寺へ御預け被成と也。日本に三軀の名作の佛像也。といへり。一説には、芳春院殿逝去の後、照圓寺へ御預け被成共、云ふ。照圓寺は表末寺の棟取の御坊なる故に、諸人同事に聞き覺えたる歟とあり。右兩説いづれ正説ならん。芳春院殿は元和三年七月逝去にて、逝去後に

彼の本尊を下げ渡されたるなれば、貞享二年の由來書に記載せし本尊佛の趣意等も過聞なるべし。藩祖利家卿建てられし制札寫。

禁 制

本願寺末寺

- 一、當寺參下向之外見物人いりこむ事。
- 一、普請道具・竹木以下に付て非分申かくる事。
- 一、寺内井門前喧嘩口論狼藉之事。
- 附、ひるね仕事。

右條々若違犯之族有之者、堅可處罪科者也。仍如件。

文祿三年文月日 判

三州志に引證せる由來記に、寺地を城邊に賜る處、元和元年玉泉院殿の居所と成に依て今地へ移轉すとあり。三州名跡誌には寛永十一年今地へ移轉とす。

○別院立花會

西・東兩別院共に毎年七月七日は御花摘と稱し、立花會ありて、金澤市中は勿論、郡方の邑民男女參詣する者夥し。明治改曆以後は八月一日を式日とす。此の立花會の起原はいまだ詳かならず。改作所舊記に、延寶二年九月十九